

外用剤 新工場が完成

ジャパンメディック

生産能力倍増へ

来月稼働 受託製造拡大目指す

医薬品製造のジャパンメディック（富山市横越、前田康博社長）が建設していた外用剤の新工場（第四工場）が完成した。ステロイド剤など高薬理活性成分を含むかゆみ止めなど外用剤の専用工場として十月中旬から本格稼働させる。医薬品製造の全面的な受託が可能になった改正薬事法に対応し、大手製薬会社からの受託生産やOEM生産（相手先ブランドによる生産）の拡大に向けて外用剤の生産能力を倍増する。



10月中旬から本格稼働する外用剤の新工場

新工場は、本社敷地内で外用剤の第三工場の南側に隣接して建設した。同工場とほぼ同じ規模の鉄骨二階建て約二平方メートル。製剤から包装までの一貫生産ラインを導入し、OTC（薬局・薬店向け）薬を中心に、かゆみ止めのほか、保湿剤、消炎鎮痛剤などの外用剤を手掛ける。皮膚の炎症を鎮めるステロイド剤など薬理活性の強い成分を含む特殊品の専用工場と位置付け、第三工場の手掛けていた特殊品の生産も移管。他の製品と生産を分離し、製造、品質管理をより厳

格化する。設備投資額は七億三千万円。大手製薬会社が中堅メーカーへの生産委託を加速していることなどを背

景に、ジャパンメディックは受託やOEM生産を伸ばしている。新工場の生産額は実質的な初年度となる来期（十九年二月期）は五―六億円を見込み、三年後までに十億円に引き上げる計画で、今期二十四億円を見込む総売り上げも三十億円以上を目指す。